

Title	II 日本の家計貯蓄率はなぜ高いか
Author(s)	HORIOKA, CHARLES YUJI
Citation	経済論叢 (1984), 134(1-2): 126-128
Issue Date	1984-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/134033">http://hdl.handle.net/2433/134033</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第134卷 第1・2号

- 
- ニコルソンの原価管理思考について……………野村秀和 1
- 日本曹達から日曹コンツェルンへ……………下谷政弘 28
- ウォルワース会社における予算  
システムの確立……………斎藤雅通 57
- 經濟民主主義と社会主義……………古河幹夫 84
- 1820年代末フランス製鉄業における資本・  
賃労働関係……………清水克洋 100

經濟学会記事

---

昭和59年7・8月

京都大學經濟學會

## II 日本の家計貯蓄率はなぜ高いか

京都大学経済学部講師 HORIOKA, CHARLES YUJI

### (報告要旨)

日本の家計貯蓄率は長年比較的高い水準を保ってきており、民間企業の設備投資を資金的に支えてきた意味から日本経済の高度成長の主な原因の一つとなってきた。しかも、今日のような安定成長期においても、日本の家計貯蓄は政府の赤字を賄ったり、海外の貯蓄不足を補ったり、依然として非常に重要な役割を果たしている。にもかかわらず、われわれの日本の家計貯蓄行動にたいする理解はまだ不十分であるといえる。

もちろん、これまで日本の家計貯蓄に関する分析は数多く行われ、また数多くの仮説が提示されてきた。たとえば、家計貯蓄率の高さの原因として(1)所得の高い伸び率、(2)ボーナスという制度、(3)消費者金融の遅れ、(4)税制における貯蓄にたいする優遇措置、(5)日本人の国民性などのような要因が挙げられている。このような要因の重要性は否定できないが、その多くはもう既にある程度吟味されてきたということもあり、私自身の研究においては、今まであまり見られなかった方法で接近を試みることにした。その接

近方法というのは、家計貯蓄行動を目的別に分析することに特色がある。なぜこのようなアプローチを選択したかという点、家計貯蓄率に影響する要因の多くは、ある目的を通じて影響を与えるからである。たとえば、地価の高さは住宅購入のための貯蓄を通じて家計貯蓄率に影響するし、年金の水準は老後のための貯蓄を通じて影響すると考えられる。このような関係を明確にするためには目的別の接近方法がいちばん適切だと思い、このアプローチを追求してみることにした訳である。

定常的経済では、ある目的のために貯蓄をしている人々の貯蓄はその目的のための貯蓄を取り崩している人々の貯蓄の取り崩しによって相殺されるため、具体的な目的のための家計部門全体の純貯蓄は0になる\*。

\*一つの例外は土地・住宅やその他の実物資産の購入のための貯蓄であり、この場合は目的が達成される時点で金融貯蓄は取り崩されるが、同時に貯蓄の一種である実物投資が行われるから、定常的経済においても家計部門全体のその目的のための純貯蓄が正になり得る。なお、教育を人的資本への投資として見なせば、教育のための貯蓄の場合も理論的には同じことが言える。

しかし、日本経済は定常状態から大きく乖離しており、そのため家計部門全体の各目的のための貯蓄が0を上回り、これが日本の家計貯蓄率の高さの主要な原因の一つであるというのが私のテーゼである。

貯蓄増強中央委員会の『貯蓄に関する世論調査』によると、子供の教育費・結婚資金、土地・住宅の購入、新・増・改築、および老後の生活のための貯蓄が日本の家計の（予備的動機以外の）主たる貯蓄目的であり、上記の仮説をこれらの目的に適用してみた。子供の教育費のための貯蓄は進学率の急速な伸びや教育費の上昇のため正であるが、家計貯蓄の5パーセント弱しか占めない。結婚のための貯蓄もそれほど重要ではないが、住宅関係の貯蓄は膨大であり、家計貯蓄の2、3割に達する。住宅関係の貯蓄がなぜこれほど高いのかというと、主に地価の高さ、その急速な上昇率、家計の非弾力的な住宅需要、根強い持家志向、といった要素の間の相互作用の結果であるようである。

老後の生活のための貯蓄に関しては、ライフ・サイクル仮説によれば、日本における所得の急速な伸びが平均寿命の長さと同様に最近まで低かった公的年金の水準と共に多額な老後生活のための貯蓄を生み出したことになる。しかし、ライフ・サイクル仮説は果たして日本に適用できるのであろうか。世論調査によると、日本人は老後の生活を賄うにあたっては貯蓄の取り崩しよりも子供からの援助に頼り、一番よく面倒をみてくれた子供にお礼として多くの資産を相続させるようである。すなわち、日本人は老後の生活がある程度子供からの「ローン」によって賄って、死亡した時点ではじめて遺産の形でそのローンを返済することになる。ただし、その遺産というのは親が蓄積した貯蓄であれ

ば、間接的ではあるが、老後の生活を賄うにあたって自らの貯蓄に頼っていることになる。つまり、日本の文化的要素に従ってアメリカ風のライフ・サイクル仮説を修正さえすれば日本にもこれは適用でき、日本の高い家計貯蓄率の一つの説明になり得る。